
平沢唯、誕生日パーティーにて

不幸男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平沢唯、誕生日パーティーにて

【Nコード】

N9692Y

【作者名】

不幸男

【あらすじ】

こんにちは！平沢憂です！今日はなんとお姉ちゃんの誕生日なんです！それで家で誕生日パーティーを開くことになりました。そのパーティーの風景がここに詰まっています。時系列は3年生最後の文化祭が終わった後くらいです。なるべくキャラは近づけたつもりですので若干のキャラ崩壊は勘弁してください。それではどうぞ、お楽しみください！

(前書き)

ども、不幸男です。

またもや!!

またもや!!

誕生日に間に合いませんでした…

でも頑張って書いたつもりなのでよかったら読んでください。

平沢唯生誕祭

こんにちは。

平沢憂です！

今日はなんと、お姉ちゃんの誕生日なんです！

「お姉ちゃんそろそろ起きないと…」

「憂」

私がお姉ちゃんの部屋に入った時にはお姉ちゃんはすでに起きていました。

「私、今日から18歳！！」

「お姉ちゃん、おめでとう！」

「えへへへ。少しは大人っぽくなれたかな？」

「うん。すっごく大人っぽくなったよ！」

「ありがとう！！！！憂！！！！」

そういってお姉ちゃんは私に抱きついてきました。

その変わらない暖かさにつつまれながら今日も私は感謝します。

お姉ちゃんが元気をくれるおかげで今日も私は元気に過ごせそうだよ。

「あ、そうだ。お姉ちゃん、そろそろ誕生日パーティーの準備をしないと…」

「はっ！！忘れてた！！」

今日は11月27日、土曜日…そして平沢唯の誕生日。

今日は土曜日と言うことで学校も無いので平沢家で唯の誕生日パーティーが開かれることになっている。

誕生日パーティーは午後から。

だからこんな朝早くから買い物にいかないと誕生日パーティーに間に合わないのだ。

憂は前日、前々日から誕生日のための買い物に行きたかったのだが、自分の誕生日パーティーのための買い物だから一緒に行きたいと唯から要望があつたので唯と一緒に行くことにしていたのだ。

しかし唯は受験生。

学園祭が終わってからは授業も長くなり、残って勉強することもし

ばしば。

だから当日まで買い物に行けなかったのだ。

でもそこは憂。

しっかりと買い物物の時間まで計算して、十分に午後からの誕生日パーティーには間に合うように家の掃除などの出来るだけの準備はしてきていた。

「寒いねー、憂」

「そうだね。学園祭が終わったころぐらいから急に冷え込んできたね」

「うう。寒いー。この寒さで頭が凍りついちゃったらどーしよー？折角勉強始めたのに…」

「大丈夫だよ、お姉ちゃん。このくらいじゃ頭は凍らないよ。それより風邪をひかないかが心配だよ」

「そこは大丈夫！！おみかん様の力をいただいでるから！！ビタミンCだよ！！みかんパワーだよ！！」

唯はクリスマスに憂からもらった手袋をはずし、みかんの食べすぎで黄色に染まった手を憂に向ける。

「ふふふ。この黄色い手はおみかん様の力の象徴なのだよ」

そんなことを言いながら唯は腕をくねくねと動かす。

それを見て思わず顔が綻ぶ憂。

お店から帰るまではそんな他愛もない会話が続いた。

店から帰ってくると憂は予想していたよりも時計の針が早く進んでいることに気づく。

このままでは間に合わなくなってしまっ、そんな時間だった。

「それじゃあお姉ちゃんも部屋で誕生日用の飾りを作って。私はお料理を作るから」

「憂、いっぱい作るんでしょう？私も手伝おうか？」

「ううん。大丈夫だよ。」

唯はいかにも『私もお料理したい！！』という顔で憂を覗き込んだが、憂としてはリビングの飾り付けが最大の譲歩だった。

リビングの飾りを作る時に使うハサミでさえ唯に持たせるのは怖いのに、ましてや唯にお料理なんてもってのほかだった。

憂からすれば、唯には部屋でじっとしてほしい、というのが本音だ。

でもこんなにやる気を前面に出している姉に対して待機命令を出せるほど憂は鬼ではない。

「私、飾り付けとかのセンスないからお姉ちゃんに飾り付けをしてもらいたいな」

「うん。そこまで憂が私の飾り付けに期待しているのならば、私は素晴らしい飾り付けを魅せて、期待にこたえてあげよう…あ、今のみせるは魅力の魅だからね!!」

唯はドタドタと可愛らしく子供ののように廊下を走り、部屋へと入っていった。

しかし唯が自ら作った鎖（折り紙を輪っかにして作ったやつ）の中から救出されるまでそう時間はかからなかった。

「おじやましまーす！」

平沢家のドアが勢いよく開かれ、軽音部のメンバー＋1人が入ってくる。

「やつほー！おーい唯、来たぞー？」

「はいー！あがって、あがってー」

唯はまだリビングで飾り付けをしているので返事のみで答える。

そのかわり憂が軽音部を出迎える。

「みなさん、どうぞあがってください。あの…まだ飾り付けが終わってなくて、リビングでお姉ちゃんが飾り付けしてますので…あ、スリッパこれ、使ってください」

「おお、相変わらず出来た妹だな…」

澪が感嘆の息を漏らす。

「ところで憂ちゃん、この長い鎖はなに？」

紬は玄関の横からリビングまで伸びている長い折り紙製の鎖を指差した。

「うあっ、ホントだ…なんだこれ？」

「ああ、それは…」

「それは私の18歳の誕生日を祝う祝福の鎖だよ！！りっちゃん！！」

奥からリビングの飾り付けを終えた唯が出てくる。

「お前、祝福の鎖って…」

「そうなんだよ、私の新たな旅立ちを祝福しているんだよ！！」

「新たな旅立ちなのに縛るための鎖が祝福って、唯…お前…」

「えへへ。本当は作りすぎたら止まらなくなっちゃって気づいたらこんな長さに…」

「唯先輩、18歳にもなつてなにやってるんですか、もう。憂も何で止めなかったの?」

「私はお料理作るのに夢中で…」

「お料理?憂ちゃん、今日のメニューは何かしら?」

「おい、さわちゃん、がめつくな」

「いやーじゃない!!!私今日のために朝、何も食べてこなかったんだから!!!」

「人の誕生日パーティーでどれだけ食べる気ですか、先生…」

「大丈夫です!!!お料理はたくさん作りましたから!!!」

「ほらー憂ちゃんもこう言ってるわけだし、じゃんじゃん食べるわよー!!!」

「でもさあ、さわちゃん。最近、お腹出てきたんじゃない?」

「り、りっちゃん?ど、ど、どどいう意味かしら?」

「あーあ。折角、輝いてるのになーさわちゃん」

「いいわ。わかりました、わかりました!!!明日はなににも食べません!!!」

「結局、食べるんですか…」

「と、とりあえず中に入りましょう。玄関で止まってるのも限界です！」

梓は入ってきたのが最後だったので一番ドアに近い場所にいた。

流石の平沢家の玄関でも5人は多かつたらしく、梓は背中にドアノブが当たっていて痛かったようだ。

「そいえばそうだな。それじゃあ改めて、おじやましませーす！」

全員でもう一度、お邪魔しますを合唱。

憂が出したスリッパに足を入れ、リビングへと足を踏み入れる。

リビングは唯が作った鎖だらけだった。

というか鎖が壁という壁につけられている。

「唯ちゃん、こんなに鎖を……」

「どんだけ作ったんですか、先輩……」

とてもじゃないが新たな旅立ちという感じはしない装飾だった。

むしろ鋼の檻。

「そんなことはどうでもいいわ！早くご飯を！……ご飯はおかずよ……」

半狂乱という言葉がふさわしいほどの目つきで料理を探すさわ子。

そんな姿を見た一同はさわ子に彼氏できない理由の一部を垣間見た気がしていた。

「今から料理運んできますので、とりあえずみなさん、こちらの席に…と言ってもコタツですが、お座りください」

半狂乱の顧問とは裏腹に大人な対応を見せる憂。

「唯、お前、憂ちゃんと血、つながってないんじゃないか？」

律がふざけて唯に聞いてはいけない一言を放つ。

「え？なんで？」

誕生日特製の三角帽子をかぶりながら答える唯。

「だって憂ちゃん、大人すぎるだろ？唯とは大違いじゃん」

「私だって大人っぽいもん！！朝だって憂に聞いたら大人っぽくなつたって言ってたもん！！」

「いや、実の妹に大人っぽいか、とか聞くなよ…」

「でも兄弟って憧れるわあ」

「そっかムギは兄弟いないんだもんな」

「りつちゃんは弟だっけ？」

「うん、さとし。さとしはいい子だよ」

「ってなんで漣が答えるんだよー」

「どうせ律、さとしの事、褒めないじゃないか」

「いや！！すごく褒める気だった！！」

「じゃあなんて言つつもりだったんだ？」

「え？…あー…あいつはー…そう。あいつはかくれんぼがうまかったな」

「え？かくれんぼ？」

「そう。かくれんぼ。あいつ隠れるのはすげえうまいんだよ」

「かくれんぼ…やってみたいわー。お家でかくれんぼ！！」

「いやムギの家なら1日かけても見つからないとか、さらにありそうだから無理だろ…かくれんぼ」

憂ちゃんの料理が運ばれてくる間、そして料理を食べる間もこんな他愛もない会話が続いた。

憂が出した料理をあらかじめ食べ終わり、ひと段落ついたところで律がある提案をした。

「よし。じゃあ一通りご飯も食べたところで恒例のプレゼントタイムと行くか！」

「おー」

「別に恒例って程、パーティーやってないだろ」

漣が飲み物をすすりながらもっともなことを言う。

「いーんだよ、雰囲気が出れば！ーそれじゃあ最初は誰から行く？」

一瞬の空白の後、梓が恐る恐る手をあげる。

「じゃあ私から……」

「おう梓、かましてやれー！」

「プレゼントはかますようなものじゃないですよー！」

梓は律から唯に向きなおし、用意していたプレゼントを差し出す。

「これ、私がお勧めするバンドのCDです。多分、唯先輩好みの曲もたくさん入ってると思うので是非聞いてみてください」

「わー、あずにゃん、ありがとうー！」

いつも通り、いやいつもの2割増しくらいの強さで抱きつく唯。

「なんか無難ね……面白みがないわ」

「だなー」

「もっとこう…梓ちゃんが自分に猫耳付けて『プ、プレゼントは私ですにゃん！もらってくださいですにゃん！』って言えばよかったのに。そのためにこの前、猫耳メイド服あげたでしょ？」

「いやです！！なんでそんなことしなくちゃいけないんですか！！」

おっさんのように胡坐をかきながら憂がさつき追加で買ってきたチーカマ（チーズかまぼこ）をむさぼり食べるさわ子。

発言もそれに伴い相当なおっさん化していた。

いや、いつものことだが…

「よーしじゃあ次は私行くなー！」

律が唯の前に立つ。

「りっちゃんはなにくれるの？カチューシャ？」

「これはやらん！！これは私の魂だあ！！」

グワーンと両手をあげて威嚇のポーズ。

「これが唯へのプレゼントだ」

律は背後からプレゼント包みされている箱を取り出す。

「わー、結構大きいね。これなあに？」

唯はこの箱の周りをぺたぺたとさわり箱を吟味する。

「ふっ、あけてからのお楽しみだ」

「ん〜…多分びっくり箱だからあとでいいや」

「ちょ、おい！！そうだけど！！確かにびっくり箱だけど！！…びっくり箱はあける前に見破られるのが一番恥ずかしいんだぞ！！」

「それじゃあ次は私だな」

「おい！！私はスルーか！！」

透はすがりついてくる律をことごとく無視し、用意しておいたプレゼントを手渡す。

唯は律の時とは違いすぐに包装紙を破き、中身を確認する。

「私の時とはえらい違いだな、おい」

「おお、可愛いぬいぐるみだぁー！！」

「また無視か、無視なのか！！」

「唯、ぬいぐるみとか、好きだろ？一応可愛いな、って思ったやつ、買ってきたんだけど…どうだ？」

「うん！！すっごく可愛いよ！！ありがと透ちゃん！！」

「そっか…よかった！そのキリンのやつとアライグマのやつで悩んでそっちにしたんだ」

「アライグマ！？アライグマもあるの？今度お小遣い入ったら買いに行こう」と。漣ちゃん、あとでお店教えてね」

「あ、一緒に行くよ」

「本当？ありがとう！！」

「それじゃあ次は私ね」

胡坐体制から勢いよく立ちあがるさわ子。

「次はさわちゃん？顧問は普通、最後じゃないの？」

確かに全員の中では暗黙の了解のごとく、さわ子はトリだろうと思っていたので驚いても仕方がない。

「そんなムギちゃんの後に渡すなんてなんて私、絶対に嫌よ！！！！
ありがたみが減るじゃない！！！！」

さわ子はこれが漫画なら後ろの背景に『ドーンッ』と書かれそうな勢いで叫んだ。

場が完全にシラケに支配されたところでさわ子がこれでもか、と言っくらいに自らが持ってきたプレゼントを掲げる。

『太陽

！！』と叫びだしそうだ。

「私のプレゼントはこれよ、はい、唯ちゃん、お誕生日おめでとつ」

「わー、ありがとう。…おお、新しいピッグだ!!!しかも10枚詰め合わせ!!!」

「ふふふ、女の美しさはまずお肌から、ギタリストの美しさはまずピッグからってね!!!」

「ちよつと待ってください!!!」

梓が机を勢いよく叩いて立ち上がる。

「なんで私の誕生日の時は猫耳メイド服で唯先輩の時はピッグなんですか!!!」

梓はさわ子にじりじりと詰め寄るがさわ子はどこ吹く風と言う感じで

「え?だって唯ちゃんは恥ずかしがらないから面白くないじゃない」と言い放った。

「り、理不尽です!!!」

「この世は喰うか、喰われるか…面白いが、面白くないかなのよ!!!」

「いや、さわちゃん、それ流石に意味わかないから…」

「それじゃあ次は私ね!!!」

「ムギの…プレゼント…か」

ある意味全員が一番気になっていたところだ。

琴吹グループの愛娘、琴吹紬は一体何のプレゼントを持ってきたのか…

「一体、どんなものが飛び出すのか…これは見ものね!!」

この中で一番長い時を過ごしてきたさわ子でさえ、緊張のあまりジュースを一气飲みするほどだ。

いや、割といつもそんな感じだが。

「まさかムギ先輩、クーラーとか屋敷とか車とか…じゃ、ないです、よね？」

「ふふふ」

「なんだ？その笑いは！！もしかして本当に…？」

律が驚きのあまり立ちあがって紬を凝視する。

「憂ちゃん、お願い」

「はい」

紬は憂に合図すると憂はどこかへ行ってしまった。

状況から察するにきつとプレゼントをとりに行ったのだろう。

「おい、ムギ、もしかして憂ちゃんはもう知ってるのか？」

「うん、冷やさないといけなかったから…」

「ひ、冷やさないと…だと！？まさかアザラシ！？いやペンギン…？」

「もう、律先輩、そんなわけないじゃ…ないですよ？ムギ先輩？」

「あ、梓が不安になった！？」

「ふふふ」

「不敵な笑み！？」

「みなさん持つてきましたよ」

憂の声が聞こえたと同時に一斉に顔を憂に向ける。

それはもう餌を投げ入れられた金魚のごとく。

憂が持つてきたのはちよつと豪華なケーキだった。

「あー。そういえばまだケーキ食べてなかったな…誕生日なのに」

「よかったです…アザラシとかじゃなくて」

「何！？ケーキ！？ケーキがあるの！？もちろんミルクティーもあるのよね！？」

「相変わらず、がめついですね、さわ子先生」

「いいのよ、今日は食べまくるの!!!」

「いや人の誕生日パーティーなんだからもつと遠慮しましょうよ!!!」

「そこで遠慮したら…私が、私でなくなるのよ!!!」

「た、確かに…」

「おい、漣!!!納得するな!!!」

「それじゃあとりあえず蝋燭に火をつけますね。暗くなりますのでみなさん、注意してください」

憂がそう言って電気を消すと蝋燭の明かりだけボウツと浮かび上がった。

蝋燭の光によって照らされるケーキは店に並んでいるものと比べ、立派であり、しかも紬が用意したもののためきつと高級食材の中でも厳選して選びぬかれたものだけを使っているのだろう。

紬のケーキを見なれているため軽音部メンバーは気づかないが明らかにその辺で手に入るようなケーキのクウォリティーではなかった。

「ハッピーバースディートゥーユー」

電気が消えてから一瞬置いて憂の誕生日恒例ソングが聞こえてくる。

それにつられて思い出したかのように軽音部のメンバーも歌いだす。

「ハッピーバースディートゥーユー」

「わー、ありがとう！ーそれじゃー消すよー？」

「おう、ささっと消しちゃえよ」

ぶっきらぼうに答える律。

「よし、それじゃあ……」

唯が大きく息を吸い込み蝋燭の火に自分の息を吹きかける。

しかし蝋燭の火の方も簡単には消えなくなかったらしく、抵抗して体をくねらせ、唯がくりだす息をもの見事にかわしていった。

その戦闘が1分程、続いたがとうとう観念したのか、はたまた天寿を全うしたのか、蝋燭の火は実に唯の36回目の攻撃によって消えてしまった。

「おめでとう！ーお姉ちゃん！ー」

「おめでとう！唯！ー」

「おめでとう！ございます！唯先輩！」

「おめでとう！唯ちゃん！」

蠟燭の灯が消えた途端に湧き上がる拍手と讃える声。

「お姉ちゃん、これ、私からのプレゼント。ハッピーバースデーお姉ちゃん!!」

憂は正にこのタイミングという拍手がやんだ瞬間に唯にプレゼントを手渡した。

「憂…？私に？……ありがとう!!憂!!」

妹からもらったプレゼントに歓喜する姉。

これはいいコンビである。

「あけてもいい?」

「うん」

包みを破き、中を拝見する。

「わあ!!毛糸の帽子だ!!」

憂がプレゼントしたのは手編みの帽子だった。

憂は唯が受験で授業が長くなった時間や学校に残って勉強してくる時間、つまり憂が家で一人の時間に毛糸を編んでいたのだ。

「お姉ちゃん、頭がいつも寒そうだったから…これで暖めて受験勉強、頑張ってるね!!お姉ちゃんと過ごす時間が少なくなってしまうのはちょっとさみしいけど、お姉ちゃんが頑張ってる姿を見ると

私も力が湧いてくる…。だからお姉ちゃん、頑張ってね！！」

「ありがとう、憂！！！私はこんな優しい妹を、持って幸せだよお！！！」

半泣きになりながら憂に抱きつく唯。

「ちょ、ちょっと、お姉ちゃん、苦しいって…」

強い力で抱きしめているのか憂が嬉しい悲鳴をあげる。

「本当、いい姉妹だよな…」

「なんだ？ 漣？ 兄弟でも欲しくなった？」

「茶化すなよ、律…」

「あれ？ 梓ちゃん、どうしたの？」

みんなが梓の方を見ると梓も何故か泣いていた。

「あ、あれ？ なんで私…泣くつもりなんてなかったのに…」

「どうしたんだよ、梓？」

「いや、先輩たちが受験してそれが終わったら卒業じゃないですか。卒業して、それで、それぞれの道に、行って、バラバラになったら、放課後ティータイムは、もう、解散なのかな、って思うと…」

初めは小さな粒だった梓の涙は言葉を重ねていくたびに大きな粒へ

となつていった。

「もうこの、放課後ティータイムで、もう、もう、歌うことは、演奏することは、もうないんだなつて…そんなの、嫌じゃないですか…もっと私、このメンバーでバンドしてたいです…！もっと、もっと、澁先輩の厚く支えてくれるベースと…！ムギ先輩の優しく優雅なキーボードと…！律先輩の走り気味でも力強いドラムと…！唯先輩のズレ気味でも生き生きとしたギターと…！演奏したいです…！！…だから…」

「あずにゃん」

唯がいつの間にか憂から手を離し、梓の目の前に立っていた。

「な。なんですか？」

「むぎゅー」

「な、な、なんなんですか!？」

「あずにゃんは不安なんだよね、放課後ティータイムが解散してしまつかもしれないって」

「だって先輩たちは卒業して…」

「うん。卒業するよ。私たちは卒業する。」

それに別々の進路に進むかもしれない。

でもね。

放課後ティータイムは解散なんてしないよ。

どこに行っただって、どこにいたって私たちは放課後ティータイムなんだよ。

たとえば、みんながバラバラになってもまた集まればいいんだよ。

桜高軽音部が放課後ティータイムじゃない。

私たちが放課後ティータイムなんだよ。

そしてこのキーホルダーを持っている限りは放課後ティータイムだよ！！」

そうやって唯は『ん』と書かれたキーホルダーを掲げる。

「全く…唯らしい意味が分からない理屈だな」

律はそうぼやきながら自分のキーホルダーをさわる。

「ええ！？これでも私、頑張ったよ…！」

「でもなんかいいな…！」

「どこにいても私たちは放課後ティータイム…！」

「唯ちゃんらしいいい言葉じゃないの…まあ、りっちゃんが言った通り意味が分からない理屈だけだ」

「そんな〜さわちゃんまでえ…」

「そうですね…意味、わかんないですよ…でも唯先輩らしいです、ね」

「あずにゃ〜ん、あずにゃ〜ん、だからね、さびしくないよーって
いいんだよ、あずにゃ〜ん」

「だから抱きつかないでください!」

「もうそんなこと言わないでえ〜あずにゃんのいけずう〜」

唯の一言で笑い声があがる。

パーティーはまだまだ終わらない。

この日、平沢家の光は深夜1時まで消えなかった。

どうでもいいことだがさわ子が1日の絶食を経て、ふらふらで学校
に来たことは言うまでもない。

(後書き)

ここまで読んでいただきありがとうございます。

ん

最後がなんか駆け足になったのが心残りです…

でも唯ちゃんへの愛をこめて頑張りました!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9692y/>

平沢唯、誕生日パーティーにて

2011年11月29日02時47分発行